

格差社会について

—ポール・クルーグマンの『格差はつくられた』を読みながら—

青年は未来の希望である フランツ・ファノン

土橋 貴*

1. なぜ本書を読むのか

2008年現在アメリカは、最富裕層と極貧層が二極対立的に存在する「格差社会（gap-widening society）」になってしまったといわれている。1960年代から1970年代にかけてアメリカは、「スタッグフレーション」と呼ばれる極度の経済不振に陥ってしまった。その内容は<販売不振+インフレ>をさす。製品の販売不振はデフレをもたらすはずなのに、なぜか悪性のインフレを惹起してしまった。その原因を労働側の①労働生産性の低下と②賃金上昇に求めた資本は、生産力も上げられないのに高い賃金を取るだけの中産階級の労働者をレイオフするような政策を断行できる政権を期待した。それには「リベラリズム（福祉重視主義）」を標榜する「民主党」ではなく「共和党」が政権を担当するのがベストであると資本は考えた。そこで1980年民主党政権担当者のジミー・カーターに挑戦し勝利し大統領の座を射とめたのがロナルド・レーガンであった。ヤン・ネーデルセン・ピーデルスの『グローバル化か帝国か』によれば、レーガン大統領の政策を立案したのは、「シカゴ派経済学者」であるのは正しいとしても、その「物質的基礎」は既に「低賃

金・労働集約的・強搾取的生産、ならびに労働者に対する敵視」さらには「低課税モデル」に基づく「アメリカ南部の経済戦略」にあった。彼はそれを「ディキシー資本主義（Dixie Capitalism）¹⁾」と呼んだが、レーガンはそれをソフィスティケートした形で次のように要約しながら持ち出した。①「金持ちへの減税策」次に②「反福祉政策」そして最後に③「漸進的失業政策」により「中産階級（middle class）」を没落させること、以上3つであった。レーガノミックスは、デヴィット・ハーヴェイの『新自由主義』によれば、「新自由主義（Neo Liberalism）」と「新自由主義国家（Neo Liberalism State）」は「70年代の特にスタッグフレーションにより「労働側に奪われた富を取り戻し「階級権力（class power）の回復を企図²⁾」するために要請された。アメリカは、国内における資本蓄積戦略として持ち出したそれを、世界に対してバージョンアップさせ普及させたが、それが①「自由化」（国営企業の民営企業への転換）②「規制撤廃（外資の参入の承認）③「福祉の停止」を内容とする「アメリカン グローバリゼーション（american globalization）」であったろう。

2008年現在アメリカは、格差社会どころ

*本学法学部教授

か、ハンドレールなき「スベリ台社会 (slope society)」となり、一旦底までスベリ落ちたら這い上がることがまずできない社会となった。これまで述べてきたように超格差社会は<自然的>ではなく<人為的>もたらされたことが分かった。となると問題は、このような中産階級社会を不幸のどん底に突き落とす社会を<誰>が<いつから><なぜ><どのように>つくっていったか、そして<どのように>中産階級社会を再生していくか<か>が緊急の課題となろう。そのような時実にタイムリーな著作が現われた。それがポール・クルーグマン (Paul Krugman) の『格差はつくられた』(原題は『リベラルの良心』)である。同書でクルーグマンが「本書が伝えようとする重要なメッセージは、全ての根源はアメリカの人種差別問題にある³⁾」と言い切っていることに注意を払わなければならない。レーガノミックスといわれる国家による新自由主義という経済政策は人種差別主義を徹底するために呼び込まれたことをここで確認しながら、本書を読んでいくことにしよう。

2. 格差の糾弾

①誰によってそしてなぜ格差社会はつくられたか

クルーグマンは、自分は1952年生まれだが、「戦後 (Postwar America) アメリカ」の経済は「中産階級社会 (middle class society)」をつくるために努力してきたのであり、政治もまた「民主党 (Democratic Party)」と「共和党 (Republican Party)」による「超党派 (bipartisanship)」的な合意によって、中産階級が支配する国をつくってきたといった。だが1980年代を待ってそこから転落してしまった。この超党派的政治を壊したのは「共和党」であった。共和党の政策は、クルーグ

マンによれば「アメリカをニューディール時代以前に戻すどころか、1890年代から1920年代にかけての「革新時代 (progressive era)」に逆行させるものであった⁴⁾」。超党派的政治の終わりは超右翼的な勢力の「保守派ムーブメント (movement conservatism)」によって共和党が乗っ取られたことによる。アメリカは①1870年代からニューディール直前までの超格差社会 (これを彼は第1の「長期の金ぴか時代 (the long gilded age)」と呼ぶ)、そしてそれに対する反動としての②ニューディールから1970年代までの平等社会 (これを彼は不平等を大幅に圧縮したので「大圧縮 (the great compression)」の時代と呼ぶ)、そして1980年代から現在までの③「第2の金ぴか時代」としての超格差社会へと、時計の振り子のように極端から極端へと揺れながら来ているが、それとタイアップする形で政治も共和党の極端な党派政治から超党派政治そしてまた共和党の極端な党派政治へと揺れ戻しを見せている。クルーグマンは民主党の路線に何らのブレもないという。ブレがあるのは共和党である。「所得格差」が縮小したとき共和党は民主党に接近し、それが50年代から60年代にかけての超党派的政治につながったとクルーグマンはいう。そして彼はさらにいう。だから共和党の党派的政治が始まったとき富の不平等分配が始まったのだと。ではなぜ第1の金ぴか時代は長く続いたのだろうか。それは労働組合の力が弱かったから、また1910年当時ほぼ14%の成年男子労働者が「市民権」を持たない移民労働者であったから、さらには南部の黒人も差別により公民権を剥奪されていたからであった。クルーグマンはいう。「長期の金ぴか時代」を許してしまった理由は、「今日のアメリカ同様、さまざまな集団が経済的な利害を共有しながらも、文化・人種的に分断されていたた

めに、極端な格差に対し、政治的に挑むことができないでいた⁹⁾」からであった。「恥知らずの時代」(ジェムズ・D. ライト)ともいわれる第2の金ぴか時代の今日、第1の金ぴか時代のゾンビを生き返らせてしまったと彼はいう。クルーグマンはいう。格差社会を是正するヒントを見つけるためには第1の金ぴか時代の超格差社会を大々的に<圧縮>してしまい、平等社会を<つくりだした>大恐慌時代の「ニューディール政策」を再検討すべきであると。1920年代から50年代にかけて出現した「大圧縮」の時代の特徴は「所得格差の縮小(富裕層と労働者層の富の格差と労働者間の賃金格差の縮小)」にある。では大圧縮をもたらしたものは何か。それは富裕者への「増税」(個人への所得税、相続税、法人税)であった。クルーグマンによればアメリカを平等社会へ変身させたのは当時の政権の①富裕層への増税②組合の権限拡大への支持③賃金格差是正のための賃金統制期間の実施であった。

②保守派ムーブメントの巻き返し

格差拡大への舵切り

「ニューコンサバティブ」は自らを、「体制」としてのニューディールの大圧縮に挑戦するアウトサイダーだと規定し、左翼的な政策を止めさせるために「保守派ムーブメント」を展開したが、その先駆者はウィリアム・F. バックリーであった。彼は宗教と資産を守ることに熱心でまた反民主的な人間であった。後のレーガンになると保守派ムーブメントは「白人の黒人解放運動に対する反発と共産主義に対する被害妄想」によって広く大衆に支持されるようになっていった。これが勝利を得ることができたのはひとえに「ビジネス界からの熱い支持」つまり莫大な政治献金であったろう。

ところで「平均所得」とは「国の所得の合計を国民の数で割ったもの」といわれるが、確かに70年代アメリカの平均所得は上昇していた。だがとクルーグマンはいう。ビル・ゲイツが今バーに客として店に入ってきたら確かに店の客の平均収入は急上昇するだろうが、だからといって彼以外の客が以前よりも裕福になったわけではない。それにしてもなぜ平均所得が上昇したのか。それは少数の人たちがスーパーリッチになったからである。産業労働者階級の中産階級化とその維持は1949年に「ゼネラルモーターズ」と[全米自動車労組]との間で結ばれた「労使協定(デトロイト協定)」にあった。協定締結のお陰で「比較的平等な所得配分」が行われたが、残念なことにこの協定は1970年代に破棄されてしまった。これにより第1の金ぴか時代に逆戻りしてしまったとクルーグマンはいう。第2の金ぴかの時代とは、第1のその「大拡大の時代」に戻り、スーパーリッチの所得の大拡大とそれとは逆に労働者の所得の大縮小をもたらしたそれであった。

時計の針が逆回転してしまったのだ。大圧縮の時代をもたらしたのは政治の力だったが、大格差社会をもたらしたのもまた政治の力であった。格差の拡大とは「福祉政策の解体」であろう。クルーグマンによれば所得格差が拡大する前に既に共和党の「鋭い右シフト」が開始されてたのだ。それが勝利した理由の①にさまざまな反ニューディール派が1つの流れとなって合流したことがあげられるであろう。ニューコンサバティブという少数のエリートグループや反共グループや経営者たちのグループが合流し1つの勢力として現われ、これがレーガンを大統領に押し上げたのであった。その理由の②には「選挙における不正行為」つまり「民主党に票を投じようとする者たち(アフリカ系アメリカ人)」

に対する選挙妨害とか「投票集計そのものの不正」があったことがあげられるであろう。これは大統領候補ゴア氏に対する不正行為によって分かるであろう。

3. 格差是正の方法

クルーグマンは「新しいニューディール政策」の実施を模索する。想うに古代から現代まで政治家や政治思想家が理想の政治体制を「中産階級支配 (mediocracy)」に仰いできたのは、古代アテネのソロンやペイシストラトスやローマのグラックス兄弟が<農民的な中産階級>の創設へ情熱を傾けてきたことや、19世紀以降の<産業労働者的な中産階級>の創設に心血を注いできたことから察しがつこう。プラトンの『国家』やアリストテレスの『政治学』を待つまでもなく、政治体制の揺らぎは1国に超富裕層と極貧層がいて戦っているとき起きる。そのような2つの層が間対峙し戦っているときには実は1つの国に2つの国があると見てよい。これは現在の南アフリカに見られる現象である。だから体制の安定にとり絶対中間層の存在は欠かせないし、またそのためには格差是正の努力は欠かせないといえよう。だが共和党の保守派ムーブメントは、格差を拡大せんとして国家権力を民主党から奪取し、そうすることで富を超富裕層に有利なように再分配をしようと決意した。その先に何かあるかといえば「貧困と飢えとホームレス」であろう。現実には日本の大都会に幼いわが子を連れダンボール箱に住む親子づれが現われたことに、思いを馳せれば分かる。

クルーグマンは『格差はつくられた』の①「第10章 平等で格差のない政治」と②「第11章 緊急を要する医療保険問題」で、格差を是正する方法を提示しているので見て

いこう⁶⁾。①についてクルーグマンはいう。2006年の中間選挙で「民主党の勝利と議会在左にシフトしたことは何を意味しているのだろうか」と。アメリカ国民は「平等で格差のない政治」を求めているのだと思いをこめて彼はいう。共和党の保守派ムーブメントは、白人の非白人に対する人種差別に乗っかり、権力を民主党から奪い80年代から21世紀冒頭の今日まで政権を担当してきたが、それも終わりを迎えようとしていると彼はいう

次に②について説明しよう。「新しいニューディール政策」としての「国民皆医療保険 (universal health care)」制度の問題である。クルーグマンは「アメリカは、裕福な国々の中でも珍しく、国民に基本的な医療保険を提供していない」国だという。このことを堤未果の『ルポ貧困大国アメリカ』により説明しよう。彼女によれば1980年代からのネオリベラリズムのもとで政府は患者の自己責任の下で国民の「医療費自己負担率」を拡大し「保険外診療」を増やす医療改革を行ったが、これが医療格差をもたらした。堤によれば既に2005年に、医療保険に加盟している100万人（もちろん中産階級が多かった）が高い保険料を払えずそれを解約していた。国民皆保険制度がある国と比較すると、それが無いアメリカ国民1人あたりの年間医療費は2.5倍高い5635ドルで、例えば日本では30万円を越えることのない盲腸の手術がニューヨーク市では343万円になってしまう。あるいは日本のように一律35万円の出産育児一時金制度がなく自己負担するしかないアメリカでは、入院出産費用が1万5000ドルかかるので妊婦は日帰り出産してしまう⁷⁾。

もちろん自分の健康を管理するのは基本的には自分の責任であろうが、それが金銭の面でどうしてもできないという人に対し救助の

手を差し伸べることを止めよとまではアメリカ人は考えていないとクルーグマンはいう。アメリカ合衆国は「より公正なシステム」により医療の「より充実したサービス」を提供できると彼はいう。「メディケイド」と1965年に開始された「メディケア」という公的医療支援制度が<低所得者>や<65歳以上の老人や身体障害者>に医療サービスを提供しているが、前者はここ8年間で受給者数が50.4%増え状況を悪化させ、後者は1983年コストを下げ利益を出すために「DRG（診断群別定額支払制）」システムを導入したが、それにより重症患者にしわ寄せがいくようになってしまった。2008年現在アメリカ人のうち約15パーセントが全く保険に加入していないといわれているが、2010年にはそれが5200万人を超えてしまうと予想されている。クルーグマンによれば、2008年現在、医療保険危機は「雇用主拠出保険」の加入者が減少しているために現われている。2006年雇用主拠出保険加入者の割合は掛け金上昇のために減少していた。1家族の平均年収は2006年で1万1000ドルで、これは中間層労働者の年収の4分の1以上であり、それよりも低い年収の労働者にとり保険料は高すぎる。だから保険料支払いを躊躇してしまう。当たり前のことだが民間の保険会社は医療保険をできるだけ「支払わない」（医療損失を抑えること）で済むようにして利益を出すしかない。だから「保険を必要とする人々には保険を売らない」ことで利益を出していくしかない。医療が進歩すれば保険料は当然高くなり高い保険料を負担できなければ保険には入らなくなる。これでは悪循環である。クルーグマンはいう。どんなに「保険業界」と「製薬業界」が反対しようとも「国民皆保険制度」という「単一制度」が最もよい制度であることをPRしていくことが大事であると。

クルーグマンは、「大圧縮」時代といわれる1930年代から40年代にかけて起きたラジカルな格差是正策は大恐慌という「危機」の時代に起こったのであり、その意味で危機の時代ではない現在にあっては、ドラスティックな変化を期待すべきではないといい、今アメリカ人が望むべきことは大圧縮ではなく「節度」であるという。かつてアリストテレスは『政治学』で、金持ちの「傲慢」と貧民の「怨恨」を抑制するのは、中産階級の「中庸」の精神つまり節度だといったが、クルーグマンもまた古代ギリシアのあのアテネの「国制（ポリティア）」像なるものを継承しているといっている。

4. 日本の今後の課題

歴史は何か時計の振り子のような運動をしている感じがする。20世紀の「後期資本主義」（国家により組織化された資本主義）は19世紀の「前期資本主義」（自由放任型資本主義）に対する反動であり、21世紀の「ポスト後期資本主義」（ネオリベラル型資本主義）は19世紀のその反復再生であろう。それと平行して国家の型も19世紀の「前期資本主義国家」（リベラル国家）から20世紀の「後期資本主義国家」（介入主義国家）を経て21世紀の「ポスト後期資本主義国家」（ネオリベラル国家）へ変化してきたが、21世紀の国家は20世紀のそれへの反動であり19世紀のその反復再生である。しかし反復再生すればするほど双方の間には<ズレ>が生じる。一方の国家では自由は<国家からの自由>であり他方の国家ではそれは<国家により強制された自由>つまり「自助（self reliance）」であるからだ。

読者はクルーグマンの『格差はつくられた』の「格差是正」の問題を、世界に「自由

化」と「民営化」と「反福祉」を押し広げようとするアメリカン グローバリゼーションによる 21 世紀のポスト後期資本主義とそれを強力にサポートするポスト後期資本主義国家の関係と、それらに対する反動として近い将来出現するであろう「新しい資本主義と国家」とは何かという問いかけから理解すべきであろう。彼はそれを民主党の「新しいニューディール政策」に求めていると思われる。クルーグマンは、共和党から民主党に政権が変われば、格差を是正し中間階級を復活再生できると考えている。幸せなことだ。

ところで日本は現在格差社会どころか<超すべり台社会>になってしまったといわれている。21 世紀冒頭の今日拡大していく格差による中産階級社会の消失は、日本の場合もまた自然に発生したのではなくアメリカングローバルリストにより背中を押される形で、とりわけ政権与党によって積極的につくられてきたものである。自由貿易帝国主義国家アメリカは、資本蓄積戦略として自国でレーガノミックスという形で行ってきた経済政策（「金持ちへの減税」や「自由化」（関税障壁の撤廃）や「民営化」（官業の民営化への転換）そして「福祉の廃止」（貧民救済の撤廃））を、グローバルゼーションという名で日本に押し付けてきた。日本の政権与党が、アメリカに市場を開放し過剰なほど儲けの場を提供してきた結果、日本の企業は蓄積資本の大幅減少に見舞われた。

「資本（capital）」とは<貨幣の無限の自己増殖>をさしているが、増殖が叶わないとなれば最後には労働者をレイオフするしかなくなるだろうし、青年層はいつでも切り捨てられる「労働者予備軍」としてプールされる存在となるしかない。これがフリーターやニートや派遣社員と呼ばれる「プレカリアート（不安定労働者）」が出現する背景であろう。

青年がプレカリアートの立場に長い間追い込まれるようなことが起これば彼らが精神に変調をきたし、自殺一步手前の<リストカット>や<オーバードーズ>をやりかねないことは最近のさまざまな事件や事故から容易に察しがつこう。戦後徐徐につくられた産業労働者的中産階級は、<働かずして高給を取るばかり>と叱責され政権与党と資本のジョイントパワーにより解体されつつある。中産階級は常日頃上昇志向的で底辺に滑り落ちるのを恐れる存在である。だから中産階級は未来に夢を託しそれに向かって努力する。未来を失えば今をどのようにして生きていけばよいのか分からなくなる。そこで 1920 年代から 30 年代の<戦間期>の混乱が亡霊のように我々の前に現われる。そこにハイデガーの『存在と時間』（1927 年）の時間概念が我々に取り付けてくるのではなからうか。20 世紀最高の哲学者といわれたハイデガーは、存在の意味は「時間性」にあるといったが、それを次のような難解な言葉で説明した。「現存在は、到来的である限りにおいてのみ、本来的に既在しつつ存在している」。これを日常用語に直すと次のようになるだろうか。「現存在」（人間）は死のみが待つ<未だない未来>に先駆して雄雄しく勇気を持ち生きべきであり、またそのような存在の只中で<最早ない過去>が死の結末を迎えるべく「予定」づけられていた、そのような死を自己の「命運」として甘受しなければならぬ<現在の自己に出会わなければならない>。「目的（telos）」が隠されている未来をなくせば人間は、ハイデガーにいわれるまでもなく、否応なくそのような現在の自己に出会うだろう。最近の若者にまさに<ウケル>言葉に<オワッテイル>があるが、未来を失ったからこそ彼らは<死に対して自由を保持する>のではなく、オワッテイル自分を終わらせ

るために＜死に対して驀進してしまう＞の
らう。進む方向を逆にしなければならない。
＜死への自由＞から＜死からの自由＞へ。そ
のためにはこの中産階級の復活再生をはかる
ことが喫緊の課題となるであろう。

註

- 1) ヤン・ネーデルフェン・ピーテルス（原田大津男・尹春志訳）、『グローバル化か帝国か』、法政大学出版社、「第1章 新自由主義的グローバル化」を参照。
- 2) デーヴィット・ハーヴェイ（渡辺治監訳）、『新自由主義』、作品社「第1章 新自由主義ということ」を参考。
- 3) ポール・クルーグマン（三上義一訳）、『格差

はつくられた』、早川書房、18頁。

- 4) ポール・クルーグマン、同書、8頁。
- 5) ポール・クルーグマン、同書、31頁。
- 6) ポール・クルーグマン、同書、特に「第11章 緊急を要する医療保険問題」を参照。
- 7) 堤未果、『ルポ 貧困大国アメリカ』、岩波書店、特に「第3章 1度の病気で貧困層に転落する人々」を参照。1999年のアメリカで患者の最も大きな死亡原因は、医療過誤であり、その数は7万1000人と異常に多い、また使い捨て医療器具の使い回し等による院内感染は年間180万人である。堤の「第4章 出口をふさがれる若者たち」によれば「小さな政府」と「大きな市場」という新自由主義政策が「いのち」や「くらし」や「教育」のエリアをも侵食している。自分の命を守るために軍隊に入るしかないというのでは、それ自体矛盾であろう。

On Gap-widening Society
—Reading P. Krugman's 'A Conscience of Liberal'—

Tadashi DOBASHI
Faculty of Law, Chuogakuin University

Abstract

- ① My recent and central theme is Gap-widening society. I have studied for many years that why Gap-widening society appeared and how it should be remedied.
- ② In this article, referring on P. Krugman's 'A conscience of Liberal', I analyze terrible effect of expansion of unequal society in North America.
- ③ I would like many readers to imagine near future of Japan from this article.